様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 22 年 5 月 26 日現在

研究種目：若手研究（B）
研究期間：２００８～２００９
課題番号：20720072
研究課題名（和文）　キューバにおけるヘミングウェイ研究

研究課題名（英文）　Hemingway in Cuba

研究代表者
高野　泰志（TAKANO YASUSHI）
九州大学・人文科学研究院・准教授
研究者番号：50347192

研究成果の概要(和文):アメリカで開かれた国際学会のキューバに関するセッションに参加し、情報収集をした上で、実際にキューバに渡航し、主に旧ヘミングウェイ邸で調査をした。その結果、ヘミングウェイ晩年の宗教観に関して非常に重要な発見があった。

研究成果の概要（英文）: Attending the international conference held in Kansas City, I joined a panel on Hemingway and Cuba.　At the Hemingway's house in Cuba, I discovered an important material concerning his religious attitude in his later years.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	500,000	150,000	650,000
２００９年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総　計	1,000,000	300,000	1,300,000

研究分野：アメリカ文学
科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学
キーワード：ヘミングウェイ、キューバ

１．研究開始当初の背景

現在、日本でのアーネスト・ヘミングウェイ研究はアメリカにおける研究成果に基づいて形成されている。アメリカと民主主義を代表する文化的アイコンとして捉えられているのである。しかしヘミングウェイが死に至る直前までその人生の３分の１を過ごしたキューバでは、彼の文学はキューバ国民文学として、つまり共産主義文学として読まれているのである。実際、アメリカにおいてもカストロ政権下にキューバにとどまり、またカストロ本人とも親交があった点が問題視されてもいる。われわれ日本のアメリカ文学者はこのようなキューバ国民文学としての文脈におかれたヘミングウェイ研究をほとんど知ることがない。アメリカとキューバの国交が閉ざされている中で、むしろ日本はキューバにあるヘミングウェイ関係の資料にアメリカ以上にアクセスしやすい状況にある。

２．研究の目的

国交が閉ざされているためにアメリカ人にはアクセスできない資料がキューバには多数保管されている。ヘミングウェイが晩年

20 年以上にわたって生活していたキューバの旧ヘミングウェイ邸には、蔵書類を含め、いまだ精査されていない多数の原稿類が存在しているのである。今回の研究の目的は、これらの資料を調査し、これまで発見されていなかった新事実を発見することである。

３．研究の方法

（1）国際学会への参加

2008 年度にはアメリカのカンザス・シティで第 13 回国際ヘミングウェイ学会が開催された。この学会ではキューバからパネリストを呼び、キューバ関連のパネルが開かれた。キューバのヘミングウェイ邸に保管されている資料の概要を知るためにこの学会に参加した。

（2）キューバにおける現地調査

2009 年度の夏にキューバに渡航し、現地エージェントと連携を取りながら 2 日間にわたって旧ヘミングウェイ邸を調査した。まずは膨大な蔵書類を精査し、写真に収める作業を行った。また、ヘミングウェイ生前の知人で存命のキューバ人にコンタクトを取ってもらい、インタビューを行った。

４．研究成果

（1）国際学会

6 月 9 日から 15 日までミズーリ州カンザスで行われた国際ヘミングウェイ学会に参加し、研究発表を行うとともにキューバ関連のセッションを聴講した。キューバ関連のセッションにおいては特にキューバ時代のヘミングウェイの住居であったフィンカ・ビヒア修復に関するシンポジウムが非常に有益で、当該研究に関する有益な情報を得ることができた。しかしながらフィンカ・ビヒア（現ヘミングウェイミュージアム）の前館長であるグラディス・ロドリゲス・フェレーロによる発表が予定されていたにもかかわらず、アメリカ政府からビザの発給がおりなかったためにフェレーロの発表は中止されることになった。21 年度のキューバ渡航に関して情報収集をするために、フェレーロへのインタビューを予定していたが、それも不可能となってしまった。

学会のセッションでは、フィンカ・ビヒアの現在の状況が非常によく分かった。経済力のないキューバでは、建物の修復は難しく、老朽化が進んでいたが、そのためにこれまで疎遠であったアメリカの研究者と連携を取る必要が生じ、アメリカの修復チームがキューバに入ることになった。現在ではヘミングウェイが存命していた頃の状態に復活しているという。

フィンカ・ビヒアのセッションだけでなく、キューバで制作されたヘミングウェイ関係の映画の上映など、この学会はキューバ関連の研究動向が非常に充実していた。

（2）コブレ

キューバでは、まず最初にヘミングウェイ晩年の宗教観を確かめるために、ヘミングウェイがノーベル賞のメダルを寄付したコブレの教会に向かった。『老人と海』にも登場するこの教会は、キューバの人々に愛される非常に重要な場所であることが実感できた。飾られているマリア像の由来などを調査した結果、『老人と海』という作品の中でコブレのマリア像がどのような意味を持っているのかがより深く理解できた。またなぜヘミングウェイがノーベル賞のメダルを寄付したのか、というヘミングウェイの宗教観に関わる問題に対してより深い洞察を与えられた。

ヘミングウェイがノーベル賞のメダルをコブレの教会に寄付したのは、これまでは一般的にヘミングウェイの宗教性を原因とする説がほとんどであったが、現地調査の結果判明したのは、そこに政治的な事情も絡んでいたことである。ヘミングウェイがノーベル賞を受賞した当時のキューバはフルヘンシオ・バチスタの独裁政権によって支配されていたが、バチスタ政権と敵対するヘミングウェイは，ノーベル賞がバチスタによって奪われ、政治的に利用されるのを恐れていたという。そのために、政府の手が及ばない教会に寄付するのが最も安全だと考えていた可能性があることが明らかになった。

現在ではコブレの教会にはヘミングウェイのノーベル賞メダルは展示されていない。数年前に盗難にあったためであり、メダル自体は取り替えされたものの、現在では一般の人の目に触れないところに保管されており、さまざまな関係筋を頼って実物を閲覧できるよう訴えたが、今回の調査では見ることができなかった。

（3）コヒマル

『老人と海』の舞台となった漁村コヒマルにも調査に向かった。小さな村であり、今日では地元の漁師の寄付金でヘミングウェイの銅像が建てられている。

『老人と海』のラストシーンでは、コヒマルのラ・テラサというバーが描かれる。最後の印象的な、マカジキの背骨をアメリカ人旅行者が目撃する場面はここを舞台にしている。しかし，実際に現地に行って明らかになったのは、ラ・テラサからは漁師の舟が寄せられる港は見えないということである。ヘミングウェイがフィクションを創作するにあたって、実際の地理関係に歪曲を加えていることが明らかになった。

(4) フィンカ・ビヒア

キューバへの調査旅行の最大の目的であるフィンカ・ビヒアには 2 日間を費やした。初日にヘミングウェイの蔵書を精査したが、このときには非常に大きな発見があった。おそらく晩年のヘミングウェイの宗教観に関わるものとしては最大の発見であると考えられる。

ヘミングウェイは 2 度目の妻ポーリーン・ファイファーと結婚したとき、ポーリーンの家にあわせてカトリックの改宗している。ヘミングウェイのカトリシズムへの傾倒はさまざまな説が唱えられているが、大きく分けてふたつある。ひとつは前の妻ハドリー・リチャードソンと離婚するための便宜的な改宗であったという説である。これは今日でも強い影響力を持っている説である。

それに反対する説として、ヘミングウェイが実は最初の結婚をする前、第一次世界大戦で従軍していたときからすでに、カトリックには大きな関心を持っており、ポーリーンとの結婚はそのきっかけでしかなかったというものである。

その人生において、ヘミングウェイのカトリックに対する熱意は、その時々によって強くなったり弱くなったりしていて、必ずしも終始一貫してカトリックに帰依していたわけではない。しかし少なくとも事実としてあげられるのは、ヘミングウェイがポーリーンと離婚した後も、カトリック教徒であり続けたということである。

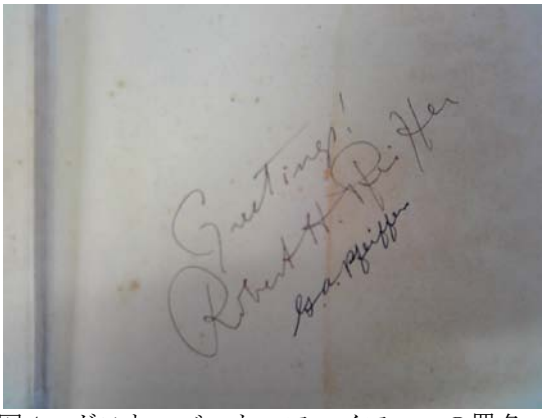

図 1　ガスとロバート・ファイファーの署名

今回明らかになったのは、ポーリーンの叔父のガス・ファイファーとの関係である。大金持ちのガス・ファイファーはポーリーンとヘミングウェイの最大のスポンサーであった。ヘミングウェイはガス・ファイファーに車を買ってもらったり、サファリ旅行をする資金援助を受けたりしていたのである。一般的にカトリック教徒は離婚を認めていないので、ヘミングウェイがポーリーンと離婚した後はファイファー家とは縁が切れたと考えられていたが、今回蔵書を念入りに調査してみたところ、離婚後 10 年近くたってから、ガス・ファイファーから親戚のロバート・ファイファーという宗教学者が書いた宗教に関する研究書をサインつきで送られていることである。この関係は一度にとどまらず、その数年後にはロバート・ファイファーの 2 冊目の著作が、今度は直接ロバート・ファイファーから送られている。

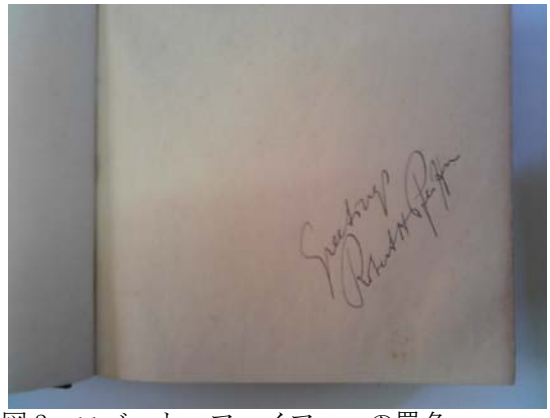

図 2　ロバート・ファイファーの署名

これまで蔵書リスト自体は作られており、ヘミングウェイの所有していた書物の一覧は入手可能であったが、実際に現地に行って現物を閲覧することで、書籍の表紙に書かれたサインを発見することができた。これはヘミングウェイとファイファー家との関係を見直す大きな根拠となるだろう。ポーリーンと離婚後もヘミングウェイはカトリックへの信仰に関して、ガス・ファイファーの指導を受けていた可能性があるのである。

その裏付けとなるかのように、その他の祈祷書や聖書など、実物を目にすると、相当使い込まれてぼろぼろになっており、ヘミングウェイの宗教に対する姿勢は，これまで考えられてきたよりはるかに強いものであったことが伺える。

また、ヘミングウェイは息子たちをフィンカ・ビヒアに呼び寄せた際は、教会に通わせ、宗教行事に参加させていたことが分かった。宗教儀礼の手ほどきの本に、ヘミングウェイから息子にあてたメッセージが書かれていたのである。

調査 2 日目に，生前のヘミングウェイを知る老人たちにインタビューを行い、ヘミングウェイのカトリック信仰に関する上記のような推測の裏付けをしてもらった。一般に晩年のヘミングウェイはアフリカなどの部族宗教に熱心であったとされているが、それらの根拠になる品物などはサファリ旅行に行った際に持ち帰っただのお土産に過ぎないという証言であった。

これらのことから、ヘミングウェイの晩年の信仰に関しては、先行研究で当然とされていたことを大幅に見直さなければならない

ということが明らかになったのである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）
① 高野泰志「ニック・アダムズと『伝道の書』---ヘミングウェイ作品における宗教観再考」九州大学大学院人文科学研究院『文學研究』第 107 号、2010 年、67-86 ページ
② 高野泰志「マリアの陵辱---『誰がために鐘は鳴る』における性と暴力」九州大学大学院英語学・英文学研究会『九大英文学』第 51 号、2009 年、25-35 ページ
③ 高野泰志「第 13 回国際ヘミングウェイ学会報告」日本ヘミングウェイ協会『ニューズレター』53 号、査読なし、2008 年、5－10 ページ

〔学会発表〕（計３件）
① 高野泰志「革命家の祈り――ヘミングウェイ作品における宗教と政治」日本ヘミングウェイ協会第 20 回全国大会、2009 年 12 月 12 日、関東学院大学
② 高野泰志「ニック・アダムズと「伝道の書」――ヘミングウェイの宗教観再考」日本英文学会九州支部第 62 回大会、2009 年 10 月 24 日、宮崎大学
③ Yasushi Takano, “The Body That Must Be Fixed: Reflections of Cosmetic Surgery in Hemingway’s War Stories” The 13th Biennial International Hemingway Society Conference in Kansas City, Missouri、2008 年 6 月、The Kansas City Marriott Country Club Plaza

〔図書〕（計１件）
① 福岡和子・高野泰志編著『悪夢への変貌---作家たちの見たアメリカ』松籟社、2010 年、304 ページ

６．研究組織
(1)研究代表者
高野　泰志（TAKANO YASUSHI）
九州大学・人文科学研究院・准教授
研究者番号：50347192